

今月の PICK UP



『花言葉 ちいさな手のひら事典』 ナタリー・シャイン／著 グラフィック社 627シ

あなたはご存知でしょうか。物言わぬ花に込められた花言葉を。それは、神話や伝説、宗教的な意味に起源し、花と共に愛や祈りを届けるメッセンジャーとして使われてきました。

本書には、80の花言葉とその由来や物語が紹介されています。例えば、エジプトの女王クレオパトラが暗殺に使った花、レオナルド・ダヴィンチが原稿の余白にいつも描く花、日本の武家社会で禁断とされた花など。豆知識として覚えておくのも楽しいですよ。

挿絵には、レトロなクロモカード（妖精や花をあしらった商品広告カード）が使われていてお洒落な手のひら事典になっています。

『猫だまし』 ハルノ 宵子／著 幻冬舎 914.6ハ



12月の検査でステージⅣの大腸がんと診察され入院を勧められても、「大切な年末年始に病院で過ごしたくない、食事管理は私のほうが詳しい」と入院を拒否し、ビールを飲んで帰る著者。このエピソードだけでも豪快です。

自らの病や医療について、また出会ってきたいくつもの生き死についてユーモアたっぷりに本音を語る、笑って力をもらえる闘病記です。

司書の おすすめ



『ウスビ・サコの「まだ、空気読めません」』 ウスビ・サコ／著 世界思想社 361.5サ

マリ共和国生まれの作者は、1991年来日、京都大学大学院にて博士課程修了後、2002年に日本国籍を取得、2022年3月まで京都精華大学にて学長を務めました。そんな日本に住んで30年を超える彼が、日本での生活において「なんでやねん」と感じる疑問を率直に綴った1冊です。普段当たり前だと思っていることを見つめ直すきっかけになるとともに、時折語られるマリでの生活や常識は、日本との差異が大きく興味深いです。



『清少納言を求めて、フィンランドから京都へ』 ミア・カンキマキ／著 草思社 993.6カ



“春はあけぼの…”で始まる「枕草子」。大学時代に読み魅了されたフィンランド人の著者が、会社の長期休暇制度を利用し憧れの清少納言を研究するため日本に滞在します。うだるような京都の夏の暑さや虫が出る古い宿での暮らしに苦労しますが、文献や資料を読み漁り、縁の地を訪れて体験したこと、感じたことが生き生きと綴られています。「枕草子」を教科書で学んだという方もこの機会に読み直してみてもいいかもしれません。

『いつかたこぶねになる日 漢詩の手帖』 小津 夜景／著 素粒社 921オ

北海道出身、南仏在住の俳人の著者による、漢詩を軸にしたエッセイ集。章ごとに挿まれる漢詩は、読み下し文でなく口語の自由詩として和訳されています。普段づかいの言葉に翻訳された漢詩は、より身近なものに感じられます。「詩は、短くて、切実で、愉快な友」。日常に溶け込む漢詩、その著者流のつきあい方を、そっと見せてくれます。

